

小林純教授の略歴および業績

1950年 5 月17日生

学 歴

- 1969年 3 月 新潟県立高田高等学校卒業
- 1969年 4 月 東京都立大学経済学部経済学科入学
- 1973年 3 月 東京都立大学経済学部経済学科卒業
- 1973年 4 月 立教大学大学院経済学研究科経済学専攻修士課程入学
- 1975年 3 月 立教大学大学院経済学研究科経済学専攻修士課程修了
- 1975年 4 月 立教大学大学院経済学研究科経済学専攻博士課程入学
- 1976年10月 休学（立教大学学生国際交流制度にて西独チュービンゲン大学留学）
- 1977年 9 月 復学
- 1981年 4 月 立教大学大学院経済学研究科経済学専攻博士課程単位取得退学

学 位

- 1975年 3 月 経済学修士（立教大学）

職 歴

- 1979年 4 月 立教大学経済学部助手（～1982年 3 月）
- 1982年 4 月 高千穂商科大学商学部専任講師
- 1985年 4 月 高千穂商科大学商学部助教授（～1990年 3 月）
- 1990年 4 月 立教大学経済学部経済学科助教授
- 2000年 4 月 立教大学経済学部経済学科教授（～2016年 3 月）
（在外研究）
- 2005年 4 月 ヴィーン労働者運動史協会訪問研究員（～2006年 3 月）
- 2012年10月 グラーツ大学シュンペーター・センター訪問研究員（～2012年10月31日）

学内職務

- 2002年4月 ランゲージセンター長（～2004年3月）
2004年4月 全学共通カリキュラム運営センター言語部会長（～2005年3月）
2006年4月 全学共通カリキュラム運営センター言語部会長（～2007年3月）
2007年4月 経済学部長（～2009年3月）
2007年7月 立教学院評議員（～2010年6月）
2009年4月 人権・ハラスメント対策センター副センター長（～2012年3月）
2013年4月 日本語教育センター副センター長（～2015年3月）

兼任（非常勤）講師

- 1980年10月 横浜国立大学経済学部（社会科学概論，1981年3月まで）
1984年4月 立教大学経済学部（社会思想史（通年），演習（後期），1985年3月まで）
1987年4月 横浜国立大学経済学部（社会科学概論，1988年3月まで）
1991年4月 横浜国立大学商学部（世界史概説，1995年3月まで。外国書研究Ⅱ（独語），1998年3月まで）
1992年4月 横浜国立大学大学院経済学研究科（原典講読Ⅰ（独語），1998年3月まで）
1994年2月 東京都立大学経済学部（社会思想史特講，集中講義：1994年3月まで）
1995年4月 横浜国立大学国際文化学部（社会史概論A，1998年3月まで）
1995年12月 東京都立大学経済学部（社会思想史特講，集中講義：12月まで）
1997年4月 福島大学経済学部（経済学特講，集中講義：1997年9月まで）
1997年9月 東京都立大学経済学部（社会思想史，1998年3月まで）
1998年4月 東京都立大学経済学部（社会思想史，前期集中：1998年9月まで）
2001年4月 横浜国立大学大学院経済学研究科（経済学特殊問題研究，2002年3月まで）
2003年4月 横浜国立大学経営学部（社会科学概論，2004年3月まで）
2006年4月 横浜国立大学商学部（社会史概論A，ドイツ学特論，2007年3月まで）
2009年4月 東京女子大学文理学部（前期：経済史，後期：経済学史，2010年3月まで）
2015年10月 放送大学教養学部（面接授業：「営利と倫理：スミスとヴェーバー」，継続中）
2016年4月 立教大学経済学部（ゼミナールB，2017年3月まで）

業績一覧

単 著

1. 『マックス・ヴェーバーの政治と経済』白桃書房, 1990.02, A 5 /251P.
2. 『ヴェーバー経済社会学への接近』日本経済評論社, 2010.02, A 5 /273P.
3. 『研究室のたばこ 経済思想史の周辺で』唯学書房, 2011.01, B 6 /273P.
4. 『ドイツ経済思想史論集』唯学書房, 2012.05, B 6 /286P.
5. 『ドイツ経済思想史論集』唯学書房, 2012.10, B 6 /302P.
6. 『マックス・ヴェーバー講義』唯学書房, 2015.01, B 6 /380P.
7. 『ドイツ経済思想史論集』唯学書房, 2015.09, B 6 /316P.
8. 『続ヴェーバー講義 政治経済篇』唯学書房, 2016.12, B 6 /360P.

共編著

1. 福井守・八木沢秀記・小林純編『スポーツとその周辺』高千穂商科大学総合科目研究会, 1985.10. 執筆部分「遊びとスポーツ」 pp. 108 125.
2. 住谷一彦・田村信一・小林純編『ドイツ国民経済の史的研究 フリードリヒ・リストからマックス・ヴェーバーへ』御茶の水書房, 1985.11. 執筆部分「ワルター・ロツツの経済政策観」 pp. 123 149.
3. 田中豊治・柳沢治・小林純・松野尾裕編『近代世界の変容 ヴェーバー・ドイツ・日本』リプロポート, 1991.9. 執筆部分「経済統合の系譜 ナウマン『中欧』論によせて」 pp. 89 111.
4. 宇都宮京子・小林純・中野敏男・水林彪編『マックス・ヴェーバー研究の現在』創文社, (2016.11.) 執筆部分「資本の増殖欲求と労働」 pp. 39 71.

共著 (分担執筆)

1. 住谷一彦・小林純・山田正範『マックス=ヴェーバー 人と思想』清水書院, 1987. 3. 執筆部分「II ヴェーバーとドイツ帝国」 pp. 77 161. (新装版 [一部改訂], 2015.11.)
2. 大田一廣・鈴木信雄・高哲男・八木紀一郎編『経済思想史 社会認識の諸類型』名古屋大学出版会, 1995.4. 執筆部分「カール・クニース ドイツ歴史学派の倫理的経済思想」 pp. 124 137. (一部改訂のうえ, 同編『新版経済思想史』2006.9, pp. 126 139 に収録)
3. 八木紀一郎・住谷一彦編『歴史学派の世界』日本経済評論社, 1998.1. 執筆部分「エミール・レーデラーの位置をめぐる」 pp. 253 278.
4. 老川慶喜・小笠原茂・中島俊克編『経済史』東京堂出版, 1998.2. 執筆部分「第 6

- 章 帝国主義の時代」 pp. 107 124, 「資本主義の精神」 pp. 56 61, 「貧困」 pp. 125 130.
5. 住谷一彦・和田強編 『歴史への視線』 日本経済評論社, 1998.10. 執筆部分「ウィーン
のオットー・ノイラート 1920年代の実践活動」 pp. 271 298.
 6. Shionoya, Y. ed. *The German Historical School*, London: Routledge 2001.1. 執筆
部分 'Karl Knies's Conception of Political Economy: The Logical Status of
Analogie and Sitte', pp. 54 71.
 7. 八木紀一郎編 『経済思想 7 経済思想のドイツ的伝統』 日本経済評論社, 2006.2. 執筆
部分「M.ヴェーバー 宗教と経済」 pp. 199 262.
 8. Hagemann, H., Nishizawa, T., Ikeda, Y. eds. *Austrian Economics in Tradition:
From Carl Menger to Friedrich Hayek*, London: Palgrave Macmillan, 2010.5.
執筆部分 'Discoursing Freedom: Weber's Project', pp. 41 61.

論文等 (単著論稿)

1. 研究ノート: シャハトの「新計画」 統計にみる戦前ナチス期の貿易構成, 『立教経済学論叢』 12号, 1978.2: 117 129.
2. 研究ノート: ヴェーバー・ノート 『科学論』 覚書 (正) (続), 『立教経済学論叢』 13号, 1978.12: 75 88; 14号, 1979.2: 71 78.
3. マックス・ヴェーバーのドイツ第二帝政社会批判 (1) (2) (3), 『立教経済学研究』 34巻 1号, 1980.6: 153 171; 34巻 2号, 1980.9: 173 201; 34巻 3号, 1980.12: 361 386.
4. ドイツ機械制綿工業における労働力の編成と選択について M・ベルナイスの社会政策学会調査報告 (1910年), 『立教経済学研究』 35巻 3号, 1981.12: 237 265.
5. ドイツ近代史における知識人エリート, 『高千穂論叢』 昭和57年度 (2), 1983.5: 459 502.
6. ヴェーバー理念型ノート, 『高千穂論叢』 昭和62年度 (1), 1987.8: 231 249.
7. ドイツ銀調査委員会と W・ロッツ, 『高千穂論叢』 昭和62年度 (2), 1987.12: 25 61.
8. 「職業としての学問」によせて, 『情況』 1993年 6月号, 情況出版, 1993.6: 58 70.
9. 不確実性, 秩序, 倫理 最近のドイツ経済学史の研究から, 『季刊経済と社会』 48, 時潮社, 1997.2: 89 98.
10. 大塚久雄と戦後の「近代」意識, 『神奈川大学評論』 26, 1997.3: 83 90.
11. 社会化と労働者運動 1920年代ウィーンのノイラート, 『立教経済学研究』 52巻 3号, 1999.1: 1 22.
12. クニース経済学におけるアナロジーとジッテの位置価, 『立教経済学研究』 53巻 1号, 1999.7: 55 69.
13. 1920年代ウィーンの住宅建設 ノヴィーとノイラート, 『立教経済学研究』 54巻 3号,

2001.1: 99 128.

14. マックス・ヴェーバー 研究の現在, 『経済学史学会年報』40号, 2001.11: 1 12.
15. マックス・ヴェーバーの GdS 編纂, 『立教経済学研究』56巻1号, 2002.6: 179 211.
16. ヴェーバー経済社会学の若干の考察, 『立教経済学研究』58巻4号, 2005.3: 75 97.
17. ヴィーン住宅建設史のひとこま (上) (中) (下), 『社会主義』517号, 2005.10: 98 103; 518号, 2005.11: 101 106; 520号, 2005.12: 64 69.
18. 幸福学者ノイラート 知識と実践, 『立教経済学研究』60巻4号, 2007.3: 29 52.
19. 自由のプロジェクト ヴェーバー経済社会学の見方, 『現代思想 総特集マックス・ウェーバー』11月臨時増刊 (35巻15号), 青土社, 2007.11: 190 206.
20. 19世紀ドイツの経済学観 シェーンベルク版ハンドブックをめぐる, 『立教経済学研究』65巻2号, 2011.11: 109 138.
21. 二つの「工業労働者問題」項目 シェーンベルク版ハンドブックをめぐる, 『立教経済学研究』65巻3号, 2012.1: 75 97.
22. ドイツの「中欧」構想 経済思想史の視点から, 『思想』岩波書店, 2012年4月号: 53 72.
23. 新自由主義について, 『立教経済学研究』66巻1号, 2012.7: 29 61.
24. ヴェーバーの音楽研究について テクストをめぐる諸事情, 『立教経済学研究』67巻1号, 2013.7: 45 75.
25. ドイツ語圏における経済学史叙述の展開 経済学史成立の背景, 『経済学史研究』56巻1号, 2014.7: 21 46.
26. 研究ノート: ノイラート研究の新たな展開 桑田学著『経済的思考の転回』によせて, 『立教経済学研究』68巻4号, 2015.03: 135 154.
27. 研究ノート: 社会思想とマックス・ヴェーバー研究, 『立教経済学研究』69巻4号, 2016. 02: 195 203.

翻 訳

1. アブラモフスキー「古典古代の都市と中世の都市」, 『立教経済学論叢』7号, 1973.9: 149 173.
2. ユルゲン・コッカ『マックス・ヴェーバー 西ドイツの研究動向』未来社, 1979.9, 82P. (共訳書, 共訳者: 住谷一彦. 1994年『[新版] ヴェーバー論争』と改題)
3. トレルチ「ストア的=キリスト教的自然法と近代的世俗的自然法」, 『トレルチ著作集第7巻 キリスト教と社会思想』ヨルダン社, 1981.5: 237 272. (住谷一彦と共訳)
4. ヴェーバー「トレルチ報告に関する討議発言 (第一回ドイツ社会学会)」, 『立教経済学論叢』20号, 1982.1: 73 85.

5. デーヴィッド・ピーサム『マックス・ヴェーバーと近代政治理論』未来社, 1988.11, 429 P (共訳書, 共訳者: 住谷一彦)
6. テンプルック「マックス・ヴェーバーの宗教社会学 過去と現在」, 『聖学院大学総合研究所紀要』第2号, 1991.12: 74-98.
7. アイゼンシュタット『文明形成の比較社会学』未来社, 1991.7, 366P. (共訳書, 共訳者: 梅津順一, 田中豊治, 柳父園近)
8. ヴォルフガング・モムゼン『マックス・ヴェーバーとドイツ政治 1890~1920 II』未来社, 1994.7, 449P. (共訳書, 共訳者: 安世舟, 五十嵐一郎, 牧野雅彦)
9. テンプルック「マックス・ヴェーバーとエドゥアルト・マイアー」, モムゼン他編『マックス・ヴェーバーとその同時代群像』鈴木・米沢・嘉目監訳, ミネルヴァ書房, 1994.9: 237-279.
10. テンプルック『マックス・ヴェーバーの業績』未来社, 1997.5, 245P. (共訳書, 共訳者: 住谷一彦, 山田正範)
11. キース・トライブ「ポリティカル・エコノミーの歴史主義化」, 住谷一彦・八木紀一郎編『歴史学派の世界』日本経済評論社, 1998.1: 171-192.
12. キース・トライブ『経済秩序のストラテジー』ミネルヴァ書房, 1998.10, 346P. (共訳書, 共訳者: 手塚真, 枘田大知彦)
13. ヨアヒム・マッテス「社会史か世界史か?」, 鈴木・山本・茨木編『歴史社会学とマックス・ヴェーバー (下)』理想社, 2003.2: 211-234.
14. ヘルマン・シューマッハー「マックス・ヴェーバー」, 『立教経済学研究』57巻3号, 2004.1: 161-186.
15. カール・アッハム「ドイツ語圏社会学の初期の活動の場としてのヴィーンとグラーツ」, 茨木竹二編『ドイツ社会学とマックス・ヴェーバー』時潮社, 2012.10: 29-59.

書 評

1. 上山安敏『ウェーバーとその社会』, 『社会科学の方法』御茶の水書房, 118号, 1979.4: 7-9.
2. 田村信一『ドイツ経済政策思想史』, 『歴史学研究』青木書店, 561号, 1986.11: 66-71.
3. ブロイアー『規律の進化』, 『社会経済史学』53-2, 1987.6: 127-130.
4. 小林昇・杉山忠平『西洋から西欧へ』, 『週刊読書人』1988年1月25日号.
5. リハ『ドイツ政治経済学』, 『経済学史学会年報』(JSHET) 31, 1993.11: 163.
6. 田村信一『グスタフ・シュモラー研究』, 『経済学史学会年報』32, 1994.10: 166.
7. 鳥越輝昭『ヴェネツィアの光と影 ヨーロッパ意識史のこころみ』, 『神奈川大学評論』19, 1994.11: 160.

8. 相田慎一『カウツキー研究』,『土地制度史学』147, 1995.4: 68 70.
9. 梅津順一・諸田實編著『近代西欧の宗教と経済 歴史的研究』,『神奈川大学評論』25, 1996.11: 132 133.
10. 松野尾裕『田口卯吉と経済学協会』,『土地制度史学』158, 1998.1: 67 69.
11. 山田高生『ドイツ社会政策史研究』,『土地制度史学』163, 1999.4: 66 68.
12. Wolfgang Schwentker, *Max Weber in Japan*,『三田学会雑誌』92 1, 1999.4: 236 239.
13. コールバーグ『マックス・ヴェーバーの比較歴史社会学』,『週間読書人』1999年10月22日号.
14. 長部日出夫『二十世紀を見通した男 マックス・ヴェーバー物語』,時事通信社, 2000年7月.(諸地方紙に配信)
15. 橋本+橋本+矢野(編)『マックス・ヴェーバーの新世紀』,『週間読書人』2001年3月9日号.
16. 山之内靖『日本の社会科学とヴェーバー体験』,『土地制度史学』174, 2002.1: 48 50.
17. マックス・ヴェーバー関連書4冊,『週間読書人』2004年2月27日号.
18. 尾近・橋本編『オーストリア学派の経済学 体系的序説』,『社会経済史学』69 6, 2004.3: 111 113.
19. Erik Grimmer Solem, *The Rise of Historical Economics and Social Reform in Germany 1864 1894*,『経済学史学会年報』46, 2004.12: 127 129.
20. 柳澤治『資本主義史の連続と断絶 西欧的發展とドイツ』,『経済学史研究』(JSHET) 49 2, 2007.12: 92 93.
21. 井上琢智『黎明期日本の経済思想 イギリス留学生・お雇い外国人・経済学の制度化』,『大学史研究』23, 2008.10: 128 133.
22. E. Nemeth, S. W. Schmitz, T. Uebel eds., *Otto Neurath's Economics in Context*,『経済学史研究』51 1, 2009.7: 107 108.
23. 藤本建夫『ドイツ自由主義経済学の生誕 レプケと第三の途』,『経済学史研究』51 2, 2010.1: 132 133.
24. 桑田学『経済的思考の展開 世紀転換期の統治と科学をめぐる知の系譜』,『経済学史研究』57 2, 2016.1: 132 133.

その他

1. その他)「エミール・レーデラーのこと」,『創文』創文社, 244号, 1984.5: 1 4.
2. 事典項目)「経済社会学」「古代国家」他,『社会学事典』弘文堂, 1988.2.
3. 資料)「マックス・ヴェーバー伝の改訂(正)(続)」,『高千穂論叢』23巻3号, 1989.3:

- 197 247; 24巻 1号, 1989.6: 135 178.
4. その他)「住谷一彦先生の人と学問」,『立教経済学研究』44巻 3号, 1991.1: 191 203.
 5. 事典項目)「家共産制」,比較家族史学会編『事典・家族』弘文堂, 1996.2.
 6. 辞典項目)「マックス・ヴェーバー」「クニース」他,経済学史学会編『経済思想史辞典』丸善, 2000.6.
 7. コメント) Some comments on K. Tribe's report, in: *International Symposium. Carl Menger and the Historical Aspects of Liberalism* (18 19. Dec. 2004), 2006: 65 68.
 8. その他)「故高橋和男氏の人と学問」,『立教経済学研究』61巻 2号, 2007.10: 287 302.
 9. その他)「大塚勇一郎教授記念号によせて」,『立教経済学研究』62巻 2号, 2008.10: i ii.
 10. その他)「小松善雄教授記念号によせて」,『立教経済学研究』62巻 4号, 2009.3: i ii.
 11. 資料紹介)「オットー・ノイラート」,『立教経済学研究』64巻 4号, 2011.3: 63 91.
 12. その他)「マックス・ヴェーバー」(温経知世 Vol. 60),『エコノミスト』毎日新聞社, 2012.12.11: 48 49.
 13. 資料紹介)「ヨーゼフ・アロイス・シュンペーター『思想家カール・マルクス』」,『立教経済学研究』66巻 3号, 2013.1: 189 197.
 14. 講演要旨)「図書館利用者の感想」(シンポジウム「ドイツの公共図書館思想」2012.12.02), *St. Paul's Librarian*, No. 27 (2012), 2013.5: 57 60.
 15. その他)「資本主義とプロテスタンティズム」,『エコノミスト』毎日新聞社, 2013.10.22: 28 29.
 16. その他)「ヴェーバーとドイツ社会政策学会」,『立教経済学論叢』82号, 2016.3: 9 19.
 17. 辞典項目)「研究編: ヴェーバーと社会思想史」,『マックス・ヴェーバー辞典』平凡社 (2017年刊行予定)

学会活動

社会経済史学会会員.

政治経済学・経済史学会会員: 学会賞選考委員 (2013 14年度).

経済学史学会会員: 編集委員 (2006.4 ~ 2009.3), 幹事 (2009.4 ~ 2011.3).

社会活動

かわさき市民アカデミー: 講師 (2015年度後期, 現代事情コース「ピケティ著『21世紀の資本』の意味を考える」担当).